

---

# An Isosceles

コニ・タン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

An Isoscenes

### 【Nコード】

N6084G

### 【作者名】

コニ・タン

### 【あらすじ】

本が好きな錦野玉藻はその日、いつも通っている図書館でとても騒がしい二人組に出会った。夢の実現を目指す今風の考えと堅実に生きる昔風の考えが交錯する、多分ハイテンポコメディ中編。

## プロローグ

私は真面目でいるのが一番好きです。

何故かって言われると困るのだけど、強いて言うならわざわざ不真面目になる必要を感じないからでしょうか？ 真面目にやっていたら他人は正当な評価をくれます。両親には褒められるし友達や先輩も信用してくれます。それは無駄に着飾ったり遊び歩いたりするより、よっぽど素敵なことだと思っんです。

だから私は毎日早起きして軽く運動、次に自分で弁当のおかずを詰めて、学校で勉強に励みながら友達と談笑をして、最後に帰りは図書館で予習復習、もしくは本を読みます。ちよっと変わってるって言われるけど。

だからその日、私は最後の過程として本を読んでいた。家で読むのも好きですけどやっぱり図書館の静謐せいひつな空気は心を落ち着かせてくれます。それに図書館に来る人は皆静かで良い人達ですから。だけど……。

2

「ほらなんかほらこいつ、これ先から何か出そうじゃん！ マヨネーズっぽいだろ、いやケチャップもありだよな!!」

「阿呆、どっちかと言うとホイップクリームやる。そのほうが可愛いやん、アンタが弱い女の子相手にケチャップとかケンカ売ってるで？」

突然現れて本を読んでいた私に話しかけてきた二人組は……。

「ああ、あれだろショートケーキとかに乗ってるやつ。でもよー、

ちよつと形が違つじやん？ 逆さだし。正確に表した方がむしろ敬意を表してる感マックスじゃねえか」  
「あかんわこいつ、盛り付け前のホイップクリーム知らんて何歳児やねん。スーパー行かへんのか？」

私の髪型サイドボニーを見て突然騒ぎ出して……。

「おいおい、なんだその失望な顔は！？ 世界を巡りゴッドオブスパーの称号を得た俺の実力を知らんのか？ もつとも俺、パンとか惣菜とかしか買いませんけど」  
「いくらそれでもマヨネーズは無いわー、ていうかなんで世界中回つてんねんよそんなどうでも良い事で！ なんか無駄に強そうな呼び名やし！！」

まるで私を漫才の一員みたいにして……。

ああ、せつかく途中まで読み進めた物語が、ここまで感情移入してきた人物たちが霧散していきます。頭の中で手足の生えたマヨネーズとホイップクリームさんが踊ってる。

何だか頭痛がします。

「入場者の方は、図書館では静かに！ それがマナーです！！」  
「うお、司書さんが怒った!？」  
「あちゃー、やってもうた……」

何で私……こんな人たちに出会っちゃったんですか!？

## 一話

いや〜ビックリした、何がビックリって図書館にいる司書さんって絶対怒らない生物だと思ってたのに怒ったからビックリした。知りたくもなかった新事実発覚。

司書さんはカウンターに帰って行ったけどもうちょっと確認したい気分もあるな、きつと眼鏡にスーツをビシッと着ていたからに違いない。

「まったく、宗太郎謝れや」

「俺だけの責任ですか!？」

「原因はウチやないもん。見てみい、女の子困っとるやん」  
おっと、女の子の事を素で忘れていたな。

見ると女の子は大きな瞳が潤んでいて顔を高潮させて必死にこっちを睨んでいた、手えぶるぶる震わせちゃってまあかわいいですと。

「ここは紳士として謝るのが妥当だな。周りの人も迷惑そうですし。特別サービスとして頭も下げちゃう。」

「おお、悪かったなマヨ娘ちゃん」

「マ、マヨ娘ちゃん!？」

マヨ娘（仮）は混乱してる。ヤベエ面白い。隣にいるルリも必死に笑い堪えてるし。

「む、不服か。マヨ娘が嫌ならクリーム娘でもいいが……語呂が悪いし微妙だし。むしろ粉っぽくてクリーム粉ちゃんになるぞ?」

「マ、マヨ……ク、クリ……!？」

うーむ初々しい、こういうのに慣れていないんだろうと思わせるリアクションだ。金魚みたいに口をパクパク、うっわなんかいいぞこの子。

制服から見ると私立の良いトコみたいだが、こういう冗談は流行ってないんだらうか?

「アカンで宗太郎！ そいつあアカン！！」

すると今まで観戦していたルリも横から参戦してきた。

混乱したまま、しかし継るような目でルリの方を見てるマヨ娘。

さながらシスターに助けを求める罪人の如く、しかしその考えは甘いぞマヨ娘よ。

「ケチャップを忘れたらあかんで、ウチはケチャ娘を推す！」

「ケ、ケチャ　！？」

それは僧服を着た悪魔だ、というわけでナイスだぜルリ。

マヨ娘はとうとう混乱が最高潮に達したようでなんか奇声を発した。ふむ、ゲットするチャンスか。

だが俺は容赦しないぜ！　まだまだ続け、俺のシヨウタイム！！

「おいおいルリ、マヨ娘さんが可哀想だろうが。いっちょこは、まともな名前を付けてやろうぜ」

「まとも言つたら耳に馴染みのあるもんがええな。そやなー、さっきの話題に関係あるもんと言つたら……」

「明太子。明が姓で太子が名前だ！！」

「関係ないやないかい！　確かに馴染みまくるけど？　ご飯にも馴染むけど話題に関係ないやん！！」

すると明太子はもう言葉も無く頭から煙を吹いてテーブルと頭を合体させてしまった。ヒヤッホウ俺の勝ちい、明太子を捕まえた！

だが次の瞬間、明太子は俺の期待を裏切り顔を上げる。その顔は、さっきと同じ目が潤むほど真っ赤な顔だった。

「た……………」

「た？　『太子とかチョーカワイー、私気に入っちゃったー』か？」

「た？　『食べ物繋がりだから関係ない事は無いでしょー！』やる？」

俺、ルリの二連撃にも動じず、明太子は「た、た……」とたを繰り返している。何か悪魔でも召喚するんだらうか、だとすると俺はピンチ！？　やべ、明太子は悪魔使いか！！

とか、どうでも良い事を思っていると、意を決したように明太子

は立ち上がって叫んだ。

「玉藻です!!」

……なにがいたいんでしょう、明太子さん。

息を切らしてまで何を言うかと思えば玉藻って、あれだろ？ 北海道の湖にあるやつ。

「に……錦野玉藻にしきのたまもです!!」

もう一回言った。どうしよう、明太子さんの意思がわからない。やはり湖の物と海産物とは日本語で語り合えないのだろうか。っていうかすごいな明太子さん、淡水と海水のミックスで無敵だぜ。

「えつと、まあ……二シキノタマモがどうした、太子さん？」

困った事があつたら相談にのるぞ？ と心配してあげるともつと怒つたように言葉を吐き出した。

「錦野!! 玉藻!!」

「オーケー。ニシキノ、タマモだな……で、ニシキノタマモが何なんだ、太子さん？」

明太子はまた俯いてしまった。ああもう明太子は口下手だなあ。しかし俺だっていつまでもスケトウダラ卵の唐辛子漬けに付き合っている暇は無い。俺を待つてくれる人がいる限り俺は行かないといけないのだよ。

しかしその時、ルリが言った。

「につぶいなあ宗太郎……ニシキノタマモはタマちゃんの名前やで？」

「タ、タマー!？」

「なるほど、タマちゃんの名前だったか……気づかなくて悪かったな、タマちゃん」

「タ、タタタタツタミヤー!？」

見事にオーバーヒートしてらっしゃる、どうやら俺たちの会話ス  
ピードにはついてこれないようだ。

しかしなんと言う希少種、ここは友好関係を気付くのが良いだろ  
う。

「タマちゃんって私のこ」

「そちらが名乗ったからにはこちらも自己紹介せねばならぬようだ  
な!!!」

タマちゃんは無視。下手なタイミングで構うと会話のテンポが崩  
れるからな。

「俺は日向宗太郎ひなたけいすけ！好物はサンマで好きな映画はガンアクション

!!! ピッチピチの15歳だ!!!」

「ウチは鈴原瑠璃すずはらるり！受験にめげず人生頑張る、キュートな同じく  
15歳や!!!」

「二人合わせて!」

「……ってコンビ名まだ決まってないやんか、ウチとした事が乗せ  
られてもった」

「あー、そうだそうだ。今度決めとくか？」

オーバーヒート済みのタマちゃんは、既にお脳が使い物にならな  
いらしく聞いちゃいけないようだった。テーブルにキスしてるし。な  
んだか、悪い事をした気分です。

ま、名前ぐらいは聞いていただろう。よし、また今度図書館に来  
た時にはもうちよつと突っ込んだ話をしてあげよう。俺って優しい。  
「その二三名様？」

と、脳みそピヨピヨなタマちゃんは元より、考えに沈んでいた俺  
や、また変なタイトルを探し始めたルリは今まで気付かなかった。  
背後から来るこの殺気、この声、これは……。

恐る恐る振り向く。そこにあつたのは、司書のオネーサンの顔。  
かなり優しそうな、寧ろ過剰に優しそうな笑顔だった。サービス  
がいいね、スマイル0円？

「館内では」

だが、表情からは連想できない、プロボクサーのジャブを思わせる素早さで手を伸ばし　俺とルリの襟首を掴み。

「お静かに」

そのまま俺とルリでタマちゃんをサンドイッチのように挟み込み、持ち上げて。

「願います!!」

素早く駆けて図書館入り口の自動ドアに叩きつけ、ドアが開いた瞬間そのまま三人一緒に蹴り飛ばすという離れ業を見せた。

っていつか、痛い！　何より一連の動きが見えた自分を褒めてあげたい!!

一瞬見えた司書さんは、閉じてしまった自動ドアの向こうで額にしわを寄せてため息を吐いていた。このアクション見ると普通の人がぽいぽい、少年漫画のようなあの一瞬の動きを俺は忘れない。

「あ、ああ……おいだされた……おいだされたちゃた……」

何故か隣ではタマちゃんが茫然自失だった。

「……いったあゝ。乱暴やなああの司書さん……って、宗太郎そこは顔から突っ込めや」

何故か隣ではルリが鼻を擦りながらリアクション希望。

「なんで今の状況で笑い狙ってかないといけないんだよ」

「ああー、分かってないなあ、そうちゃんは」

「誰がそうちゃんだ」

ちよっぴりかわいい呼び名だと思っちゃったじゃん。

「ええか、世の中にはドツキリって奴があるんや。今の内に修行しとかないぞという時にリアクション取れやんで？　という訳で、リテイクやたるっち」

「誰がたるっちだ、呼び名変わってるし」

残念ながらそうちゃんのがかわいいぜ。

ちちゅうかりテイクと言われても、どうしようもないのが現状なワケですが。司書さんはもう図書館の中でだし。いや居てもリテイクしてくれなかっただろっけど。

しかしルリは俺の態度が気に食わないようで深々と溜め息を吐いた、奇しくもさっきの司書さんっぽく。

「あかんで宗太郎……アンタの意識の低さには正直、ウチは参った。しゃあない、私はこれからタマちゃんと頂点目指す!!」

「ふえ!?!」

いきなりルリから肩に手をまわされ話題が振られたことによつて驚きその場で飛び跳ねるタマちゃん、おもしろえ。

「なあ、やろうタマちゃん!! ウチらで日本獲つたるんや!!」

「て、天下統一ですか!?! 信長公ですか!?!」

タマちゃん大いに混乱。普段がどんな子なのか気になるけど、正直面白いからすぐテンパるキャラで居て欲しいですね。

「ツチツチツチ、違うで、ウチが目指してるのは他でもない……」

ルリは見慣れた俺でもたまに恐ろしい思うほどの必死の形相で、気合で爆発ぐらい起こせそうな気迫を見せて、思いっきり発言した。

「お笑い芸人や!!」

後光が差すような穏やかな表情のルリ、しかし　タマちゃんの反応は俺とルリが思っていたのとはまったく違ったもので。さらに混乱したり、目を輝かせたり、呆れたり、そんな友達に話した時のような反応じゃなかった。

「……え?」

と一言呟きながら。タマちゃんは、心底妙なものを見るような目で、俺とルリを交互に見て、ものっ凄い、ものっ凄い嫌そうな顔を

……あつるえー?

## 二話

「私、お笑いはちよつと……」

タマちゃんはお笑いを否定した、決して表立って「嫌い」やら「駄目」やら言つたわけじゃないけどあの態度は思いつきり否定的だった。まったくもって肯定の意味が無かつたのだ。

俺とルリの夢、いつか叶うと信じてるその夢。他人に否定されて黙っているほど、俺たちは臆病でも従順でもない。

って言うか好き嫌いとか駄目です、そんなことではタマちゃんは立派な大人になれません。  
なので

「はい、まあ今日はええ天気で」

「ベルリンかよー!!」

「早いわ阿呆!! ツツコむ所ちゃうわ今のは、大体ベルリンでどんなネタ振りやねん!!」

「そんなもんロシアの首都はどこですかーってお前が聞いて、それでベルリンか! って」

「それもツツコむ所ちゃうわアホ、普通に言えや!!」

「おいおいツツコミ所流すなよ。そこはロシアの首都はモスクワだ! って言う所だろ?」

「わっかりにくいオチ被せんや!!」

タマちゃんに、漫才を見せることにしたのだ。かれこれ一週間は繰り返している。

タマちゃんはどつやら学校帰りに図書館に通うのが日課のようなので、俺たちも図書館に通いつめて隅っこでネタを見せているのだ、実に経済的。

「「どうも、ありがとございましたー」」

と、頭を下げ引つ込む素振りをする俺とルリ、つまりはここで終了。タマちゃんの顔を見ると態度はすごくアレだった、なんていうか傷つく態度。

なんと具体的にはまったくの無視、耳には届いているだろうが目線は全て本を向いている。いやまあ、そんな事態も予想して身振り手振りが必要なネタは控えめにした訳だけれども。

傷つくわー。

「あおう、静かにしたほうが良いと思うんですけど……他の人の迷惑ですから」

やっと本から目を離れたタマちゃんの第一声がそれ、笑った形跡はなかった。

今日のタマちゃん酷いよう、昨日のタマちゃんが良かったよう。

「タマちゃんどや、面白かったー？ 笑えたー？」

「えっと……」

タマちゃんは困ったように顔を背けた、これはあまりに残酷では無いだろうか……。

感情の完全冷却を施されたルリはその場でガツクシと頂垂れた。

俺もそうしたいよ、脱力したい気持ちで胸いっぱいだよ。

「タマちゃん、君はそんな子じゃなかったはずだ！ もっとわたわたする姿が似合う可愛らしい子だったはずだ！！ なのに、なのにこんな姿になるなんて！！」

「わ、私は別に何にもなってますんよう……」

「いや、俺には真珠色の豚さんに見える」

「ええ！？」

うむ、今俺の目に映るのは本を持っている真珠色の豚さんだ。

このやり取りはルリがツッコミするまで小一時間続きました、これもいいかも。

「なんて漫才師なんて目指すんですか？」

「ふあ？」

俺たちが仕方ないのでネタ帳を書いているとタマちゃんはそんなことを言った。本から目を離さずに。

うん、そういえば何故俺たちは漫才師を目指すのだろう？ 世界の七不思議だ、冒険家に探してもらわなければ。

「笑いたい時は普通に笑えばいいじゃないですか、無理矢理笑わせようと必要ないと思うんです。それになんだか将来を考えてないように思えます」

うわ、すごいぼろくそ言われてる気がするぞ。

「将来ならちゃんと考えとるで？ ウチと宗太郎はテレビに出るよな芸人になるんやもん、なあ宗太郎？」

俺はルリからの質問に「イエス、アイ、ドウ」と答えた。

「そういうの、なれるって言う保障が無いじゃないですか。なれない時とかどうするんですか？」

無視された、突っ込んでよう。

まったくこいつ等は俺の重要性が分かっていないのだ。仕方ない、聖戦に赴くでしょうか……世界が俺を呼んでいる。

「甘いでタマちゃん、なれるとかちゃうねん、なるんや。そんぐらの気持ちでおらんと立派な芸人にはなれんやん」

「それって、将来について考えて無いようなものだと思います」

くっ……引き分けが十回も続くとはな。敵も生半可な覚悟で戦場に立っているわけではないということか……！

「宗太郎、選手交代……って何一人じゃんけんしとんねん！！」

「え、なに？ 何の話？」

せっかく妄想の異世界にトリップしてたのに。ライバルの左手君は手強かったです。

「タマちゃん説得せい。ウチはお手上げやタマちゃん拳骨みたいに頭かっちかちや」

「納得させられるか分かんないけど、ラジャー」

パン、と手と手を景気よく合わせるタッチ。

入れ替わってタマちゃんの正面に向かう、なんだかやけにタマちゃんが凜々しいですね。

まず互いに黙って睨み合う。一分、二分とそれが続いた。

「おいおいタマちゃん、俺たちに将来を考えて無いとか言ってたけどさータマちゃんは考えてんの?」

「もちろんです、ちゃんと大学まで通って高校卒業までに適正を見極めて、きちんと就職できる所を探します」

うわ、この娘現代に見る大量生産の良い子ちゃんだな。実現できる人間がどれほどいるかは別として。

「おもしろくねえな」

俺の一言にタマちゃんは「……は?」と奇妙な動物を見るような顔をした。

「だってタマちゃんだって夢ぐらい何かあるだろ? 夢はかなえたじゃない」

タマちゃんはしばらく黙ると、俺を睨みつけるが如く真剣な目で見た。

「そんな夢ばっかり見ても駄目だと思います、夢を見るだけが人生じゃないし夢を追いかけて破滅しちゃう人も居るんですよ?」

正論だ、多分。そんな人だっているだろう、タマちゃんが言うんだし。

「それに、私にだって夢ぐらいあります。尊敬してる先輩と、同じ高校に進むんです」

「えー、それ夢じゃなくてただの希望じゃない? 第一希望、第二希望みたいな。夢は代え難いもんなんですよ、燃えるもんなだよ、熱血なんですよ!!!」

その時、後ろからポンと俺の肩を叩く奴がいた。また司書さんか!?

「……宗太郎、ちょっとどきいや」

ルリ……なんかじゃない。鬼だ、悪魔だ。何時ものルリとは雰囲気が違う、あれはルリの体を借りた悪魔に違いない。悪魔使いを襲

う悪魔とはこれ如何に。

俺は訓練された兵士のように場を空けた。ルリはタマちゃんの前  
に立つと両肩を掴んで威嚇するように顔を近づけた。

「こりゃあかんでタマちゃん、悲しいけど体で教えたる必要がある  
よっや……」

タマちゃんはその怖ろしさから小さく声を出して身を縮ませる。  
そのままルリはズンズン詰め寄っていき、そろそろとゆっくり俺も  
ルリの斜め後ろというポジションに着いた。  
そしてルリが叫んだ。

「病院送りにしたるでコラア!!」

「じゃあバイクの免許取るまで待ってください!!」

「本当に送ったるんかいコラア!!」

「なにおう!?」ゴチャゴチャ言っていると小児科に連れてくぞコラ  
ア!!」

「うわっ、この歳になってまでいきとうないわ」

ここで一旦会話は終了、タマちゃんの様子を確認する。タマちゃ  
んはポカーンと呆けていた……つまり、笑ってない。

うーむ、突発的なネタならば少々つまらなくても笑ってくれると  
思ったがどうやら甘かったようだ。

「へ、えっと、お二人、えー、体に、教えるって……え?」

タマちゃん、混乱一歩手前。そこに突っ込むか。

「腹よじれるほど笑わせたるんや、そないもってお笑い認めさせた  
る!! 絶対やるで、覚悟せなタマちゃん!!」

ルリは、髪を掻き揚げるモーションをしながら（実際、短いので

カッコつける以外の意味は無いっばい(不敵に笑った。俺も続き、意識的に不敵に見えそうな感じの笑みを浮かべる。

「へ、えつと、私を……？ 笑わせ……？」

混乱は最高潮、なんかもう気の毒な気がしないでもないけどやっぱり愉快だわ。

しかしそこで俺とルリの襟が掴まれた、……嫌な予感がします、デジャヴな気がします。

「前にも言いましたが……」

司書さんだった、史上最強の司書さんだった。

前と同じように、俺とルリはそのまま掴まれ 今度はタマちゃんを巻き込むことなく、二人まとめて肩に担がれた。

「館内ではお静かに願います!!」

そしてそのままにこやかに図書館の外に放り出された、あり難い事に今回は顔面からコンクリ地面に突っ込んだが、ゴメンこれ痛くてリアクション出来ない。

起き上がった時には既に司書さんの姿は消えていて、制服姿のルリが居るだけだった。

「あたた……宗太郎、無事？」

「……お、おう、今日は顔面からいったぞ」

「ええ！？ 何でリアクションせえへんの!？」

案の定、ルリから駄目出しを食らった。そんな事言われましても痛覚神経って無視しづらいのでございますわよ。

「まあルリ、今はそんな事どうでもいいだろ？」

「……確かにそうやな、でも絶対いつか練習させたるからな」

そして俺たちは立ち上がると歩き出す。

「よし、宗太郎ん家行くで。ネタ合わせせなあかん」

「オツケー、とりあえずタマちゃんの笑いのツボわかんねえから地道に探っていこーぜ」

絶対にタヌちゃんを笑わせてやる。

### 三話

「ウチ、寿司とか大好きなんよー」

「あー分かる分かる。ラーメンとかに並んで外食の定番だもんな。まあ、一般庶民は回る寿司だけど」

「そうそれやねん、ウチも一回でええから回らへん寿司行ってみたいわあ」

「お、じゃあ言った時に馬鹿なことしないように練習しようぜ」

「ええやんええやん、ほなちよつと寿司屋のマネしてよ、ウチが客として入るさかい」

「オツケー、んじゃここカウンター席で……へいらっしやいー!」

「あ、玉子くださいーい」

「大中小、どれにしやす?」

「え、サイズあるんですか!? え、えーつと、中で……」

「松竹梅、どれにしやす?」

「ランクあるんですか!? えーつと、どんなんですか?」

「ウズラの卵、ニワトリの卵と色々揃ってるよ!」

「あ、思ったより普通……つて、あと一つは何なんですか?」

「そいつは聞かねえ方が身の為つてもんだぜ、嬢ちゃん……」

「た、玉子やめます!! おススメは何ですか?」

「カリフォルニアロールだヨ、H A H A H A」

そこまで言った瞬間、タマちゃんとは違う女性の声で「今日は根本的におもしろくない」と駄目出し一閃をくらった。やっと調子上がってきたかなーとか思いながら頑張ってた漫才が中断される。

何時もの如く図書館で端の方にある二人掛けの机を二つくっつけてタマちゃんにだけ見せる漫才をしてるのだがバツサリ俺たちの漫才は斬られた、せめて最後まで聞いて欲しい、マジで。最後に怒涛のオチがあつたらどうすんだよテーマいや今回は無いけど。

「君達さあ、時たま衝撃的に面白くないよ」

と、ワタクシども若輩に駄目出ししてくれちゃってるのはタマちゃん隣の隣に居る女性。

隣に居る女性だけでは説明不足、その正体はなんとタマちゃんの先輩だ。先輩だからタマちゃん髪の毛型をパワーアップしてツインテールだったりしたら面白かったのだが、普通にストレートである。くそう、ルリもボブカットだし、奇抜を追及する人間はなかなか居ないのか。

「先輩さん……途中で駄目出しするんなら見ないで下さいよお」

図書館の隅にある椅子にぐったり倒れこんでみるが、先輩はただニコニコ笑うのみ。否、ニヤニヤ笑うのみ。

漫才は端っこでやれば最終究極形態司書様に咎められにくいと学習した俺とルリだが、ここでもう一つ障害が現れた。そう、この先輩さんである。

始まりは些細な事でこの先輩はタマちゃんが尊敬してる、つまり例の行きたい学校に在学してる人らしく、その日はタマちゃんの勉強を見る約束をしていたのだそうだ。その日、というのは何日か前で、つまり通い詰め俺たちが顔を合わせるのも必然ってワケで出会ってしまい。

『玉藻笑わせたいなら、まず私を笑わせないと話にならないよ』

こんな感じの言葉だったような気がするのだが、こうやって俺とルリの敵が一人増えたのだ。ラスボス前の中ボスって感じ。いや、別に倒すもとい笑わせなきゃタマちゃんに見せられないわけじゃないけど、タマちゃんと一緒に眺めてるだけなんだけど。

ちなみにタマちゃんは半分無視である、チラッとこっちを見てくれはするのだが、本を手放さない。これは俺に対する挑発だと思っておこう。

「姉さん、文句言っんやったら見んといてえな。ウチら、これでも

頑張ってるんやさかい……」

ルリは机に突っ伏しながら顔を隠してぶつぶつ言ってる。まあ、ここまで真正面からつまらないといわれると応えるらしい。

俺も結構きてます。

「人は叩かれて強くなるものなのだよ、鈴原ちゃん」

先輩さんは気楽に語尾を常に上げるほど御満悦な様子で言った。

確かに批判されてこそ研磨される技術ってのはあると思うのだが、ここまで漠然と「面白くない」と言われても正直どうしたらいいかいいネタが思いつきません!!

「ね、玉藻も面白いつて思わないよね？」

「えっと、私あんまりそういう番組見ないので」

俺とルリを見事に撃沈させた後、先輩さんは筆箱を取り出し出しているタマちゃんに絡む。奔放だよなあ、やっぱ向ここの学校でもこういう性格の人居るじゃないか。

なんとなく微笑ましく思っていると、右肩にずっしりと重量感。首だけ回してそちらを見ると、ルリが涙目でこちらに倒れこんできていた。

「そ、そうたるー……慰めてー」

泣くなよ、お前。いくらなんでも泣くなよ。

いやしかし、ルリの事だ。またなんか振りなのかもしれない。まったく、俺は常識人なのに、ルリのせいで変な奴みたいないない扱いされて困るなあ。

「よし、慰めてやろう！……タマちゃんが！」

「わ、私!？」

という訳で、振ってみました。タマちゃんに無茶振り。

ルリはさながら幽鬼の如く体を起こし、タマちゃんの方へと斜め体勢で机に体を投げ出した。しかもまだ涙目、予想に反して結構本気で泣きかけてるっぽいながらもチャンスは逃さない主義らしい。

「ターマーちゃ〜ん……慰めてー……」

涙目で上目遣いは普通、かなり男を落とす武器だと思うのだが、

今のルリは絶対怖い。というか、もし顔が可愛くてもこんな不思議体勢じゃ絶対ときめけねえ。

現に、先輩さんは興味深そうに眺めているだけだがタマちゃんはビクツと身を引いた。口元をたった今出した問題集で隠し、適当に中空を睨みぽつりと。

「え、えつと……鈴原さん、頑張つて……？」

かなり投げやりな慰めだった。俺達に慣れたのか最近少しずつ敬語を使わなくなってきたているタマちゃんだが、遠慮も少しずつ消えているらしい。うむいい傾向だ、仲良き事は美しき事かな。

「タマちゃん、うとう……ありがとう……」

そしてその言葉を受けたルリはタマちゃんから離れると俺の方によってきた。

「宗太郎ちよつと付き合えや、ネタ合わせするで」

「あいよ、先輩さんあるいはタマちゃんの上位存在として上玉さん。ちよつと俺らネタ合わせするんでタマちゃんと話しててください」

先輩さんは俺たちを見てへらへら笑いながら見送ってくれた。

「上玉つてのも古い言い方だねえ、しかも本来の意味じゃないし。

……まいいよ、いつてらつさ〜い」

二人で歩いてきたのはトイレの前。一応、この図書館内にトイレは二つあって、こっちは滅多に人が来ない。よくトイレに行く方なので、この二週間で把握した。

ルリは溜息をついた。

「宗太郎……なんでウチらこんな簡単に笑えるのに、タマちゃんは笑ってくれやんのやるなあ」

「謎に包まれてるよなあ」

きつと感情回路を外されたに違いない、何て思ってみる。

「もう何日もやっとなるのにミジンコも笑わへん、ウチら才能ないんやるか……」

ここは突っ込むべきだろうか？

「おいおい、お前つてもしかして……自信失くなってきてる？」

ルリは頷くように溜息を吐いた。

「うーむタマちゃんだけならいいトコのお嬢様オーラでてるし、どこかズレてるんだろうかとか思ってたのだが。先輩さん改め上玉さんが入ってきたせいかな？」

「お前さあ……それでも、人前で泣くなよ。真剣なのは分かるけど」  
「……じゃあないやん」

「よっしゃ、確かに俺らはあんまり面白くない」

「……」  
ルリは黙っている。

「そりゃタマちゃんは勉強とか超頑張ってるみたいだけど、俺たち別にそんなにやらないじゃん？ んじゃ、その勉強するはずの時間をどうしていた？ ……遊んでただろ、俺達。夢を見るのは誰でも出来るけど、叶えられるのは頑張った人間だけだ。俺達はタマちゃんを否定しちゃったけど、俺達だってちゃんと出来てなかったかもしれない」

「毎日、ネタ合わせしてるやんか……」とルリは小さく反論した。

「そこは……あれだよ、どうやったらなれるとか。ネタが面白いだけじゃなくて、ほら、色々とさ」

ふと、いつかテレビ番組で見た事を思い出した。お笑いには発声練習も重要らしい、という曖昧なことしか覚えていないが、こんな近くにも答えがあつたんだ。俺達は、地道な所を抜かしていきなりやりたい部分だけをやってたんだ……と思う。

「お前は、勉強したくないから漫才師目指してる訳じゃないだろ。やるうぜ練習、俺達は才能が無いんじゃないかって、知らなかったただだ」

「……そやな」

ルリは、阿呆みたいに口を半開きにしながら、素直に頷いた。

多分、俺もルリも気づけたのはタマちゃんのおかげだ。友人たち

の愛想笑いだけじゃ、きつと気づけなかったと思う。俺たちはタマちゃんを変えつつもりで、いつの間にかタマちゃんからも教えられていた。

「そやな、うちら若いんや!! まだまだいけるで!!」

力強く頷き。涙の後を拭いて。鈴原 瑠璃は大きな一步を踏み出した。ふむ、もう大丈夫だろう、あとはタマちゃんのところに戻るのみ。

「ったく、いつつもこんなにしおらしかつたらいいんだけどな、お前。ルリのせいで、常識人の俺まで変な目で見られるんだぜ?」

「え? 常識人? むしろ常時奇人ちゃうん?」

どうやら元気が戻ったようなので、一発頭をはたいてやった。

席に戻ると、帰ったのか既に上玉さんの姿は無かったタマちゃんだけが一人で座っている。

「おろ、タマちゃん、姉さんはどこ行ったん?」

ルリの質問でタマちゃんは俺たちに気付いたようで、ゆっくりと顔を上げた。

「あ、えつと……ごめん、先に帰ったみたい」

なんだか、少し顔色が悪い。何があったのか分からないけど、上玉さんと喧嘩でもしたんだろうか……いやいやタマちゃんは上玉さんと争いそうに無いよな。

可愛い顔が台無しだぜベイビー、とか言ってみたい気もするが、そういう台詞は「冗談でもそういうこと言っな」とルリにぶっ叩かれるので自重。

「どうしたんだよ、タマちゃん。なんか先輩と言いつたのか?」

一応聞いてみる。ルリの悩みを解決した俺は人生の先達モード。なんか無敵な気分だ、なんでもやってやれそうな気分だ。

しかし、タマちゃんはふるふると首を左右に振るだけ。愉快地、サイドポニーが跳ねる。

「いえ……ちよつと先輩は自由研究のレポート作るって言って忙しいって」

嘘ではないだろう、こんな器用な嘘を吐きそうにないし。タマチ  
ゃんは、座りながら俺達を見上げて笑った。

「日向君達はそろそろ帰るんでしょ？ 私はもうちょっとここに居  
るから先に帰っていいよ」

「うーむ、上玉さんがいないな。帰るか」

「そやな」

何が何だかよく分からないままに、俺とルリはタマチちゃんと別れ  
た。

## 四話

「はいどうもー、今日も今日とてやらせて貰いますでー」

「いやー、毎回毎回やって俺たちも有名になってきたのかなーって思いますよね」

「そんなわけあるかい、観客ホンマのちよつとやないかい。頭大丈夫かいなアンタ」

「いやこれホント、お店とか行ってもポスター貼ってるんだよ」

「嘘やー、そんなんあらへんよー。見間違っちゃうん？」

「いや絶対あれ俺の顔だつて、この顔見たら110番って書いてるけど」

「それ指名手配犯やん!! 何やったんよ!？」

「いやさすが俺、夏祭りで射的総なめにしたかいはありますねー」

「関係ないことで有名になつとるし! ちゆうかなんでそれで通報されんのあんた!？」

「ふ、嬢ちゃん……俺のライフルは景品以外も落とすぜ?……例え

ば、君のハートとか」

「あんた時々キャラなんやねん!？」

……。

いつも通りの図書館の隅、いつも通りの漫才風景。唯一違う所と  
言えば、数少ないながらも毎日居た観客が、今は居ないだけだ。

つまり、タマちゃんがない。しかも一週間近く。

「……ごつつう虚しいやん」

「言うなよルリ……何時でもハイな俺だつて気分萎えてきてんだよ」

あの情熱に燃えた日から俺達はとりあえず手の届く範囲で改良を  
重ねてきた。観客を意識した喋り、身振り手振りの活用など、自分  
達本人の感覚では大分良くなっていると思う。

だがしかし……やっぱりタマちゃんがないと寂しいです僕達。

「ウチら、嫌われたんかなー」

「ないない、それならもうちょい早く逃げてるだろ、タマちゃん」  
上玉さんが居ないのは、レポートが忙しいからって理由で分かるのだがなあ。まあ、もしタマちゃんがもうここに来ないのならあの人がここに来る理由もなくなるし。

んー怪我でもしたのかなあ、もつと軽い理由なのかなあ、勉強がはかどる別の環境があったのかなあ……なんにしても一声ぐらいかけて欲しいぜ。メアドも番号もお互い教えてない仲けど。

「なんかウチら、タマちゃんもおらへんに図書館に来るって馬鹿みたいやなー」

ルリが、椅子へと倒れこむ。落ち込みモードの机張り付きに変形して、グデーっとしている。

「実際馬鹿だけどなー」

俺も、反対側の椅子へと座る。背もたれに両腕を預けてふんぞり返る悪党のポーズ。ちよつと格好良いと思う。

「馬鹿は宗太郎だけやろ」

「お前も馬鹿だニヤロウ、そついや期末テストどうだったー？」

「ぼちぼちやなあ、宗太郎はー？」

「もつとぼちぼちー」

「もつとつてなんやねん、タマちゃんはどうなんやろなー」

「とりあえず頭良いんじゃね？俺らより」

世間話をしてみても、すぐさま止まる。どうしよう、何だかテンション上がらない。

前まではルリと二人で馬鹿やってりや良かったんだが、今はタマちゃんを笑わせると言う崇高な使命があるのでヒーローである俺は挫折しかけていた。

うーん何だか今は無性にタマちゃんに会いたいよう、よく分からないけど。とにかく会ってなんか話したいよう。

「あーもうチクショー……こんな事ならメアド交換ぐらいしてくんだった」

家は知らないし、連絡はつかないし。よく考えてみると、俺達とタマちゃんの関わりは結構浅いんだなあ。確かに「はいさようなら」で済んでもおかしくないな。

でもなんか、この別れ方は無いんじゃないか？ ちょっとこれは酷いんじゃないか？ 泣いちゃうよ？

まだ何にも返してないのに。思いつきりタマちゃん的生活を掻き乱して、乱暴にも好きそうじゃない漫才を聞かせて、そして俺達はタマちゃんから将来へ対する姿勢を学んだ。

俺達はそれに対して、まだ何にも返せてないじゃないか。何で居なくなつてんだよ。

『ウチら嫌われたんかなー』

さっきのルリの言葉がどこかに刺さった気がする。実際、タマちゃん俺達の事を鬱陶しく思っていたのかもしれないなあ。

「もしかして初めっから漫才聞きたくもなかったのかねえ、もしかして本気でいうつもり無かったのかね……もしかして」

「おいこら、宗太郎ぐいっと。」

後ろに倒れていた顔が、いつの間にか接近していたルリに持ち上げられる。アイアंकローみたいな感じで。ちよつと痛い。

「なにネガティブになつとるんや、あんたらしくもない。一個良い事教えちやる」

いや、あんたも言ってるじゃないですか……とは言えなかった。

そのまま、なんか自然と見下される姿勢になってガクガク揺らされる。うわあ何かムカつく。でも、何だ良い事って？ それはタマちゃんに関係あることなのか？

ルリは、結構真剣な顔で口を開いた。

「あの子な、タマちゃんは漫才の間、本は読んでも勉強はしてないそう思えば元気でえへん？ウチの都合のええ解釈かも知れや

んけど」

そういえば、思いだせば確かに漫才中は本を読んでいる。終われば勉強するし、来る前に勉強している事もあるが、漫才の最中に勉強することは無い。

「いつちばんええ解釈してみると、多分タマちゃんは漫才好きじゃないけど受け入れようとはしてくれてるって事ちゃうんかな？ ウチが見てくれちゃうっていじけてる間にも、タマちゃんはウチらの事知ろうとしてくれてたんちゃうかな？」

ルリは笑った。久しぶりにこんな笑顔見たと思う、最上級の笑顔。なんか俺も元気が出てきた。

「あと自覚ないみたいやけど……宗太郎も前から調子おかしいで？  
ほんま」

「へ？」

俺が？ タマちゃんじゃなくて？

「多分、初めはまともに勉強しようと思ったんやろうけどなあ……テンション高うして一ヶ月近くもそんな状態やもんなあ」

ルリの呆れ顔が、かなり近い位置にある。

そう言われてみれば、ここ最近はある調子出でなかったような気がする。体は快調のはずなのに……と思っていたが一人で気合いれすぎたか。

「うーむ、それでルリもタマちゃんからかったりのフォローに入ってたんだな……ちょっと変なテンションの時期とタマちゃんと初対面って重なって、しばらくおかしかつたみたいだ」

「いや、タマちゃんはウチも面白いからやってたんやけどな？」

タマちゃん哀れ、パワーアップした俺と今までのルリとの新連携に耐えなければならぬとは。

でも、耐えてもらおう。常に世界には犠牲がつき物なのだ。

だがしかし、あの子が病気や怪我で入院しているなら見舞いに行こう、あの子が俺の事を嫌っているなら一言謝ろう、あの子が……えーっと、もういいや、後で考える。

「よし、復活したかいな宗太郎？」

「モチ、まだちよいと感覚戻ってないかもしれないけど、まあできるだけ頑張るぜ!!!」

いつも通りの日向宗太郎、お前は出来る男だ。ついでにいい男だ。とりあえず今は、走るべし。輝かしい未来とかじゃなくてもつと即物的な場所に。

「よっしゃあるり、学校行くぞ!!!」

「お　ってなんでやいきなり!?　返事しかけてもうたやる!!!」  
「ええい、俺の相棒なら直感で分かりやがれ!　タマちゃんの学校だよ、住所聞くんだよ!!!」

うむ、分からないなら誰かに聞けばいい。完璧だ!　完璧な作戦だ!!!

「あはははは!　行くぞルリ!!!」

しかしルリは俺についてこなかった。なんでだろう。

「あのなあ、行っても教えてもらえるわけないやろ?　個人情報やで?」

「ウツセー!!!　無理なら無理で、盗み出すぐらいの気合で!!!」

俺達はまたタマちゃんに会わなきゃいけないだろうがよ!!!」

ルリは俺の叫びを聞いて溜息をつくと今度はニカツと笑ってくれた。

「……オツケーつきおうたるわ!!!　それでこそ宗太郎、ウチの相手!!!」

俺とルリは図書館の出口に向かって走り出す、明日に向かって一歩、大地を踏みしめて二歩、肩を叩かれて三歩。

……あれ?　嫌な予感がデジ　。  
「館内では」

振り向くとそこにはかのお方がおられました。

出た、出たよあの人!!!　司書様!!!　だが、今の俺を襟首掴んで叩きだせる小僧だと思ふなよ!　今日の俺は、赤くないけど三倍は強い!!!

「お静かに」

「黙らっしゃい!!」

強制的に声を被せてやった。ちよつとのけぞる司書、その隙にルリの手首を掴む。

「逃げんぞルリ、俺達の冒険はまだ始まったばかりだ!!」

「最終回の煽りみたいやけどようやった!」

呆気に取られた司書さんを無視して俺たちは図書館を出る、そして走る。

「宗太郎……教えるわけないってウチ言うたけど、あんたやったら出来そうや。多分、無理やって思ったことでもやってくれそうな気がするで!」

「当たり前だ、だって俺ですし!!」

手を繋いで走る、さあ行こう 今日が俺達の、始まりの日だ。

無理でした。

「クオラ、宗太郎」

「な、ななな何でしょうか鈴原さん?」

いや、用務員ってすごいね。他校の生徒の侵入防ぐんだね、すごいね。あんなに強かったんだ。

「あれは絶対いけるいうテンションやったのに……あそこまで盛り上げといて、そりやないで!!」

「現実には常に厳しい」

「格好良えふりすな!」

俺達二人はタマちゃん 학교に侵入するという目的を成功できずトボトボ図書館に向かっている。どうやら最近の公務員は強いのがお流行りらしい。何あの用務員、戦車ぐらいなら渡り合えそうなん

ですけど？ 司書さんとも拮抗しそうですねですけど？

なんとなくそのままでルリと分かれるのも気が引けて、一旦ここに戻ることにしたのだ。

「ま、とにかく頑張ろうぜ」

俺はルリの肩を叩く。

「頑張るって、何を頑張ればええんよ」

俺には答えられない、だって俺も分からないから。マジでダレカタスケテー。

とりあえず図書館の目前だ。自販機でジュースでも買いなながら色々考えよう。

「ん……そうたる」

と、そろそろ辿り着こうかと言う時にルリが声を上げた。

目は図書館の方を向いている。正確には、図書館の入り口……そして、その視線を追った俺もそれを確認できた。

「ルリ……逃げるか？」

「いや、ウチらが目的じゃあらへんかもしれんし」

司書様だった。宇宙における究極存在だった。さっきは猫騙しの手法で追い払ったがこうして待ち伏せしていたか。やっぱり少年漫画みたいだな、ボスつぽいけど。

「その君達」

司書様が俺たちを見つける。うわ、やっぱり目的俺達だった。

油断する暇もなく何かを投擲してくる。そんな軽々しく攻撃されてもってツツコむ間もなくアンダースロー、黄色い物体が飛んでくる。

咄嗟に真剣白羽取り！ デコで！！

「うわ、モロに当たった！ 宗太郎、大丈夫かいな！？」

大丈夫に決まっているだろうルリ、立派な大道芸だぜ？ 決して受け止めそこなった訳じゃないんだぜ？ 超痛いけど。

「今の君達に必要なものです」

司書様のそんな言葉と同時に、ルリがあつと声を上げた。見た目

では黄色いとしか分からなかったが、どうやら直方体のようだ。それなりに重いので中はずっしりと詰まっている、縦幅横幅よりも高さが無茶苦茶低いが、それでも片手では持ちにくい。

というか、ストレ-トに言ってしまうえば本である。それもかなり厚めの。

「騒ぐなど言っても無理のようですからそれで調べて帰ってください」  
「い」

司書様は「使い終わったらそこに置いてください」といつて図書館に戻って行った。実は味方だったんだね。やっべ泣けるラスボスじゃなくて四天王辺りだよこの人。最後に裏切って身代わりになつてくれるタイプの敵だよ。

恐る恐る、司書が授けてくれた必要なものを見る。それは

「おお……まさしくこれは 黄金の盾」

「なわけあるかい!! タウンページじゃないか!!」

ルリが俺の頭をはたいた。俺にツッコむな向こうにツッコめ。

いや、正体はタウンページでした。そりゃ大きいはずだよ。レベルなら90はある辞書の類だと思う。これでどうしろと。

「ああもう、あの司書さんは何を考えとるんや!」

ルリはガンガン地面を踏んでイライラしている。

同感です、幼馴染よ。

「こんなもんウチらに渡して、片っ端から電話してけつて言うんかい!!」

「おお、それは名案だルリ!!」

思いつかなかった。今までタウンページって鈍器にしか使わなか

ったから。

ルリは嫌そうな顔で俺を見る。

「……宗太郎、自分の言ってること分かってるか？ 何やるか分か  
ってる？ 電話やで、それも地区内の錦野さん全員にや」

「ベリーオツケー！ 燃えてきたあ！！」

「そないなもんで燃えんなや」とルリがため息をついていたような  
気がするが、とりあえず気にしない。

待ってるよ、タマちゃん！！

## 五話

「もうちよつとすれば三月三日ですね、雛祭りですねー」

「お、そう言えばそうやな。実はウチら幼馴染でしてね、昔も色々やってたんですわ」

「懐かしいなー。確かお前、雛人形を隠してそのまま失くしちゃうたんだよな」

「今更穿り返すなや、いやお恥ずかしい」

「そしてそれを俺が泥だらけになって見つけ、大事にしてたお雛様を失くして泣いていたお前と大団円。そしてそれ以降、お前はずつと俺に片思いなワケだ」

「ないよそんな事実！？　ちゆうか一言目から丸々嘘ついとるやん！！」

「照れんなよ、まあそれで降願掛けとせずと髪を伸ばしてるとか恥ずかしいエピソードもあるんだろ？」

「いや、私見ての通りショートやし！！」

「まったく、お前が中学卒業と共に告白すると知っている俺は今まで誰とも付き合っていないんだぜ？　感謝しろよ？」

「それ思いつきり自分が原因やで、モテへんだけやろ！！　知ってるもん、『日向君ってデリカシーないよねー』って言われてんの！！」

「はあ？　実は裏では俺はモテモテなんだぜ？　まったく、俺も偶然見た七夕でのお前の短冊にあんな事さえ書かれていなければ、今頃幼馴染の佐藤さんとラブラブだったのによ」

「ウチ知らんよ佐藤さん！　アンタの幼馴染は私だけやろ！！　つていうか何であんたの妄想の中のウチそんなロマンチックなん！？」

ちよつと夫婦漫才なノリでやってみました。しかも普通の夫婦漫

才では成り立たない幼馴染漫才！！ ヤッベこれ流行るって！！  
……というのは置いて、俺達の目の前にある襖の中の住人は  
無反応である。

どうしてこういう事になっているのかと言うと、俺達の血の滲む  
努力と羞恥心の放棄の末、ようやくタマちゃんの家を見つけ出した  
……のだが、予想通り障害があつたからだ。

なんとタマちゃんは、部屋に引き籠もっているらしい。

理由が何であるのか家族にも分からないらしい。そうになると俺達  
もお手上げだ。ただ友達として話をさせて欲しいと両親に言うと、  
意外とアツサリ通してくれた。

それにしてもタマちゃんの家凄いな、日本屋敷だよ、お庭付きだ  
よ。きつと忍者がいるに違いない、お庭番お庭番。

話がそれた。で、今に至る。どうせまた向こうで無視しているの  
だろう、本でも読みながら。ああもう、しょうがない奴だなあタマ  
ちゃんは。

「よしルリ、こうなったら正面突破だ！！」

「ええー……それ、意味ないんちゃうん？」

まあ、最終的には双方納得の末に出てもらわなければならぬの  
だが。引き籠もるって事は不満があるんだろうし、それを解消して  
あげることが恩返しになるし。

でもまあ今はいいじゃん力づくで、顔見て話せばきつとタマちゃ  
んも分かってくれるかもしれないよ、多分。

と言うわけで……襖を掴んだ。

「レッツ、オープン！！」

「早速やんなや！ 人の話きけい！」

ルリの言葉に従うつもりは毛頭ない。襖なので引っ張れば簡単に

開くのだから鍵の心配なぞいらないし。

と、思ったが開かなかった。

「あ、開かない……なんで!? 神の奇跡か悪魔の業か!? この家って呪術でもできるのか?!」

「つつかえ棒やろ、多分」

なるほど、棒を挟んで開かないようにしてるんですね。まあ、引き籠もりするんだからそれぐらいはやるのか。

しかしそうなれば逆の襖を開ければ良いだけ。こっち側にあるのでつつかえ棒は不可能、つまり俺の大勝利だ。

と言っわけで改めて開ける。

「開いた!!! けどなにこれ!？」

「タンスやろ、多分」

襖を開けると、そこはタンスでした。

いや、配置が元々そこなのか根性で動かしたのかは知らないが、目の前にはドデンと背中を向けたタンスが鎮座している。つつかえ棒どころじゃなくてつつかえ箱だこれ。仕方ないので閉めた。

さて、どうしたものか。蹴り倒してもいいが、中に居るタマちゃん心配だ。もしタンスの前に居たら潰れてしまつかもしれない。

「……来ないで下さい」

と、俺達が折角考えている所にタマちゃんの方から声をかけてきた。

「来ないで言われると、強行突破したくなるのが人間ってもんよ、タマちゃん」

「……来ないで下さい」

完全拒否。ひでえよ。声も思いつきり冷てえや。俺とお前の仲はそんなもんだったのか、タマちゃん。

入れ替わるように、ルリが前に出た。向こうから見えていないので位置は関係ないが、気分的なもんだろう。

「なあ……タマちゃん、何でこんな事になってるかだけでも教えてくれへん？ ウチらもしかしてタマちゃんに悪い事してもうた？」

しばらくの沈黙。タマちゃんの顔は当然見えないので、どんな表情かさえも分からない。ああもう、だから出てきて欲しいのに。

「……分かるもんか」

ぼつり、と。

「貴方達みたいな生き方をしてる人に……分かるもんか！！」

そして激しく。

まったく言い分は分からないが、どうやら何か根が深い問題があるようだ。そこに踏み込むほど、俺もルリもまだそれほど親しくは無いけど　なんか、放つてはおけないですよねえ。

「分かんねえよ。だって聞いてねーもん。ほれほれ話せ、何を隠そう俺様は悩み解決の達人だぜ？　この前だってルリのなあ……」

「人前で言うな、ボケ！！」

頭叩かれた、痛い。

このやりとりに襖の向こうはまた無言。今の痛そうな音を聞いたからだろうか？　恐ろしくなったからだろうか？　まあ怖いんですけど。

「……じゃあ」

あ、そんな事ないみたいです。タマさん何だか浮き沈み激しいです、今日。

「じゃあ、日向君は教えてくれるの……？　先輩か、お父さんが、どっちが正しいのか教えてくれるの？」

何を言ってるのかよく分からない、でもヒントは掴めた。何だかタマちゃんは上玉さんに言われた事と父親に言われた事で悩んでいるらしい。

「わかんね、だって内容聞いてないし。俺は未来の猫耳ロボットじゃないんだから、頼めばなんでもってワケにはいかねーですよ。だ

からもうちよい詳しく教えて？」

「先輩が、違う高校に行けっというの！！先輩と同じところに行きたいのに！お父さんも賛成してくれてるのに！私には合っていないって言うんだもん！！」

ヒントからそれほど間も立たず事実発覚。名探偵宗太郎様の活躍は次回までお待ちください、だ。

そして確かに、俺から見ればどうでもいいことで悩んでいるようだ。誰かがやるなって言ったんだってさ、ナニソレ？むしろ行けっってことじゃね？

うーむ……………。

「なあ、タマちゃん」

「な、なんですか？」

「お前さ、人に否定された事あんまりねーだろ？」

タマちゃんの反論が来ない、という事は多分当たってるんだな。

しかし俺も、いつの間にかタマちゃんを「お前」呼ばわりである、まあいいけど。こっちの方がルリを相手にしているようでやりやすい。

「俺はよく色々言われんぜ。だって馬鹿だもん！！授業態度が悪いとか言っで通知表で取った事ねーし、それで親にボコられるし？図書館行けば迷惑そうな、ゴキブリを見るような目で見られるし？ぶつちやけ褒められることが少な〜くらいだよ」

たたみ掛けるぐらいの気持ちで、言葉を吐き続ける。そして一歩下がり、突撃の用意。

こんな薄い壁、ぶち破ってやる。これが俺とタマちゃんの間壁だっつてんなら、ふっ飛ばしてやる。

それが俺だ、日向宗太郎だ。図書館でいじけてる過去は、タウンページで片っ端から電話かけてる最中にカタギっぱくない人に当たった辺りからもう捨てたんだ。

「待つてるタマちゃん、今から俺がそっちに行って現実って物を教えてやる。 突げぶへえ!？」

「ちょ、おま宗太郎のアホオ!!」

面白おかしく顔から突っ込んでみようかと思っただら、貫けませんでした。鼻を強打して、あの日司書さんに投げられた思い出が走馬灯のように。

いや、硬いんだねこれ。某番組の影響を受けて結構簡単に壊れると思っってしまった。

「く……そこまでして俺に会いたくないのかタマちゃん!!」

「ふええ!？ それ私のせいじゃないんじゃない?」

お、何だかいつものタマちゃんに戻りかけとる。

「だが俺は諦めない! 愛と正義のジャスティスキックあおう!？ ちょ、まってルリこれ折れてない!？ 足首から先の感覚が無いんだけど!？」

キックをしたら足が変な形をした。

「大丈夫やって、その足で跳ね回ってるから! ていうかタマちゃん、いくらなんでもひどいで、ここまでやるのは」

「だ、だから、私がつてるわけじゃないですってば!!」

「ぐう、しかしここで諦めてはシャテキングの名が廃る!! 食らえ、友愛と慈悲のアルティメットパ」

だが俺の必殺技は出ずに倒れてしまふ、足が……動かん。

「射的って漫才の時の設定じゃ って、宗太郎が動けへん!! 宗太郎死んどる?！ 宗太郎、宗太郎!？」

「え? ええ!？ へええ!？」

その瞬間、バツターンとダンスが無い方の襖が倒れた。その中からタマちゃんが必死の顔で飛び出してくる。そうだ、襖外せば入れたじゃないか。日本家屋って本当に閉鎖感がないな。

ともあれ、タマちゃんを引きずり出す事に成功。ふっ、あの程度の嘘に騙されるとはタマちゃんもまだまだだな。

「ぎゃー! ひ、日向君が倒れてるー!」

「タマちゃんを誘き出せた代償は右足かー……」

……「ごめんなさい、救急車呼んで欲しいです。」

とはいえ、実は痺れてるぐらいだ。なんか後から腫れてきそうな気もするが、それもまた風流ってことで。

「ふふふふ……よくぞここまで辿り着いたな、勇者よ……」

「そんな初めから満身創痍な魔王とは戦いたくないです……」

演出の為にゆっくりと立ち上がりながら（というかゆっくりとしか立ち上がれない）台詞吐いてみるが、見事なツッコミが来た。ていうかタマちゃん、こついうおふざけも通じるのねん。

という訳で、タマちゃんは引つ張り出せた。

「よし行くぞ、タマちゃん」

「え、行くなって……ひゃあ!？」

ゆっくりと立ち上がる……過程でしゃがんで爪先立ち歩き、そして片手でタマちゃんの膝をかくくんして、立ち上がりながら受け止め、持ち上げる。これで強制的お姫様抱っこの完成。暇な人は、やたらと体重軽くて足回り警戒しなさそうな人を見つけて試してみてね。

「行くぞルリ、タマちゃんを誘拐する……」

「オツケー分かった! タマちゃんを誘拐や……」

「へ、へ、え、うええ!？」

へっへっへタマちゃん、人語を話さないと明太子ちゃんに逆戻りだぜ。

タマちゃんを抱き上げた瞬間支える右足が痛む、でも弱音なんて吐かない、自業自得だし、ここでめげちゃ台無しだし。僕男の子だし。

「走んぞタマちゃん!! スカート押さえなきゃ妖怪丸出し女になつても知らん!!」

「ひああああ!？」

俺が廊下を疾走しだすと共に、タマちゃんは必死にスカートを押さえた。両手で、まるで股の間から手を通そうとしているように。

ちなみに俺は何故かルリに叩かれた。痛い。

騒がしい音に反応してきたご家族さんが驚いて固まってる隙にすり抜け、一路玄関へ。

「お宅の娘は預かった！ 返して欲しくば今日の六時まで待つてくださいお願いします！！」

「という訳で、お邪魔しましたー！！」

玄関を飛び出し、外へ。タマちゃんは真っ赤になって俺の腕の中で身を縮めており、ルリは俺の隣で笑っている。ヤツベエ楽しい。タマちゃんのためとかそういうのじゃなくて、純粹に楽しい。

「ひ、ひひっひひ……」

「あん？ ラマーズ法？ ふー言え、ふー」

「日向君！！ 何でこんな事になってるんですか！？」

玄関を出て、ルリに開けてもらって前門をくぐり、道路へと飛び出す。

別にこんな事をする予定はなかった。でも今、唐突にやりたくなつた。一応意図はあるけど、なんかもうどうでもいいや。暴走したらルリが止めてくれる、聞く気ねーけど。

「下ろして！！ 下ろしてください！！ 嫌ですこれ！！」

「なら叫べ、嫌な事あるんだろ？ 叫べば解消、だって実戦済みだもん！！」

とりあえず、訳の分からない状況に追い込んで無理矢理テンションを上げさせる。それが目的ではある。

「自分がやりたい方を選ぶ、それが夢ってもんだろー！！ 目標つてやつだろー！！ 前は否定してすみません、でもそれがお前の夢ならもう俺に文句を言う気はねえよ。叫べコノヤロー！！」

「宗太郎、このままやと国道とかまで走って行く？ 恥ずかし無いうちに言っときなタマちゃん」

俺に上から、ルリに横から覗き込まれて、さらに身を縮めるタマ

ちゃん。しかしそれは一瞬で、次の瞬間には俺の顔を無視して空を睨み、大きく、とても大きく、声を張り上げた。

「バツカヤロオオオオオ!!」

それが、この状況を作り出した俺達へか、進む道を示し続けた親へか、自分を迷わせた先輩へか、それは分からない。しかし今、タマちゃん思い切り何かを叫んだ、吐き出した。

これで全部解決したとは思わない。でも、俺達に全部解決することなんて出来ないだろう。だから、ここからは俺達の勝手に俺達のやりたいことをやらせてもらう。

「そうだタマちゃん言ってやれ。上玉さんの年増ー!!」

「ええでタマちゃん言ったれ、お父さんのはげー!!」

「おいちよつと待てルリ、タマちゃんは先輩に文句を言ったんだろ?」

「何を仰る兎さんやで? どう考えてもあれはオヤジさんへの反発やろ」

俺たちは確認するようにタマちゃんを見た。

「え……えつと……?」

いつも通り、やればいい。タマちゃん、思う存分戸惑え。ルリ、思う存分ネタ振れ。世界はそれで動いてる。

「バーカ宗太郎のバーカ!! おお分かった、タマちゃんは宗太郎に文句言いたかつたんやそうやろ?」

「ええつと……あれはちよつと、先輩が言った事が、ちよつと、えつと……」

「ヒヤツハア見る俺の正解イ!! 残念だったなルリ、タマちゃん

は俺のものだ！」

「おろ、そういう勝負やつけ？ …… まあいいわ、お元気でなタマちゃん」

「良くないです！ 私、別にそんな約束してません！！」

「ええっと、タマちゃん飼うのに許可証要るんだっけ？ やっべうっかりしてた」

「あー、残念ながら宗太郎、タマちゃんは国際保護条約があるから密輸入せな」

「何で私、さつきから動物扱いなんですか！？」

ネタが弱いというか適当というか別段面白いものではなかったが、タマちゃんにツッコませたかったのでこんなもんだらう。アドリブで他人を巻き込むには、まあ分かりやすさ第一だ。

もうタマちゃんは笑っていた。俺もルリも笑っていた。人間、テンションが上がれば自然と笑ってしまうものだ……今回はいささか邪道な手段をとらせてもらったが、芸人は語りだけで観客のテンションを左右するべきだらう。そう考えると、やっぱり自分たちはまだまだ未熟だな。

「よっしゃ！！ このまま国道まで走るぞ！！」

「へえあ！？ ちょよ、ちょっと待って日向君、私そんな、うああーお家に返してー！！」

多分タマちゃんは、これからやりたい事を見つけていくだらう。躓いたりするだらう。

けど、その時はまた助けてやりたいと思う。俺達が、タマちゃんをきっかけに変わったように。

とりあえず、メアド交換しとこう。

やっぱ漫才最っ高！！

## エピソード

三年後、私は街角で思い出の人と偶然の出会いをした。

「変わらないね、鈴原さん」

「タマちゃんもな、何年ぶりやる。うん、久々に街角であつたんやしゆっくり話そか」

鈴原さんが指で指し示すのはあの頃よく通っていた図書館、司書さんが代わつたみたいだけどどこに行つたのかな？

あの頃の隅の席に座る、鈴原さんが小さく笑いながら口の前で人差し指を立てて「静かに話しよな」って言った。その姿に思わず苦笑した。

「学校、何所に通つとるん？」

「隣の。でもここには来てるよ、駅までの途中だから」

「へえ、そう」、鈴原さんは相槌を打つ。

「鈴原さんは、漫才続けてるんだよね？」

当たり前だろうな、って思いながら質問。

「んー……頑張ってるけど、やっぱりまだ素人レベルやわ。そつちは？」

「お料理とか情報処理とか考古学とか短距離走とか、色々かじってみたけど……一応、医療関係かな」

「ホンマ、何でもやるなタマちゃん……しかも、結局エリートっぽいし」

「理系ですから」

それでも結構自信あります。

でも、これは宗太郎君が何時も怪我をしてるって聞くのが一因でもあるんだけど。

「そういえば……言っただけだと思っただけから、ありがとう。日向君もそうだけど、鈴原さんのおかげで私、先輩に逆らえたんだ」

「ほう、タマちゃん進歩したなあ。先輩さんなんて言ってた？」

「別にそんな禁止するつもりでもなかったんだけど……って。やっぱり、私が勝手に暴走してただけなんだよね」

こうして話しているとあの頃の思い出がよみがえる、宗太郎君がいないのがちよつと残念だけど。

「宗太郎君も一緒に学校なんだよね？」

「お、何で知つとるん？」

「なんでつて……宗太郎君に聞いたから、メールで」

鈴原さんが「へ？」と言って固まった。なんだか久しぶりに会ったら髪もちよつと伸びて大人しい人になったなあというのが印象だったけど、こうやってまったく動かないのはどういう事だろう。

「あ……アイツウチに言わへんつてどういう事やねん！！」

いきなり机を叩いて立ち上がった。びっくりした。

あれ？ 宗太郎君、もしかして言つてなかったのかな？

「タマちゃんもや、何で言つてくれやかつたんよ！」

「ええ！？ だつて鈴原さんのメールアドレスは知らないし、日向君も教えてると思つたし」

「ウチ聞いてへん！！」

「ええ！？」

どうして日向君はメールアドレスを鈴原さんに教えていないんだろう。いや、もし教える気がなくてもメールしてるつて事ぐらい言つてもよさそうなのに。

もしかして、鈴原さんには私とメールをしてる事を知られたくなかつたんだろうか。それつてどういう状況だろう。

私は鈴原さんの顔を覗き込んだ、鈴原さんも私の顔をじつと見る。

……ま、まさか。

「なあタマちゃん……もしかして、あの、宗太郎と、付き合つてたりとかは……」

「えつと、鈴原さん……聞いたことなかったけど、うー……ひ、日

向君と、お付き合い、とか……」

声はほぼ同時、顔が赤くなった。

それに鈴原さんと仲良くやってるってメールで聞いてたけど、これって!?

「う、ウチと宗太郎はただの幼馴染や!! 何年も一緒やのに向こうは別になんとも思っていないから、そんな事は無いで!!」

「わ、私だってメールのやり取り以外はほとんど接点無いですし!

! 休日に会ったりとか、しないし……」

言ってる内に、自然と首が下がって俯いてしまふ。向こうも顔を下げってしまった。

気まずい。何だかとっても気まずい。

「だ、大体、何でそういう話に……」

「それ、同時に言ったから鈴原さんのせいでも……」

本当に、気まずい。席を立つわけにもいかず、かといって何かを話すでもなく、硬直するしかない。

あつう、どうしよう。

どっちも動かない、他に誰も居ない。このままで何十分か経ってしまうのだから。

「よーっすルリ、お前携帯マナーモード外すの忘れる癖直せよ。って、タマちゃんじゃねえか。おー、一昨日の晩話したけど久しぶり」

空気を読まず、宗太郎君が現れてしまった。

「そ、そそっ宗太郎!? 何でおんのここに!?!」

「お前にメールしても通じなかったから、気付くまで待とうと思っ  
て懐かしき場所に來ただけ。いや、マジ暇な時はよく来るんだよな、  
ここ。新しい司書さんも話し相手になつてくれるし」

「宗太郎君……あ、あの、お久しぶり……?」

慌てて挨拶をすると宗太郎君は軽く返してくれた。

「ひつさしぶりー。つうかなんで二人とも声震えてんの？ 俺が図  
書館にいるってーのがそんなにビックリか？」

何もこのタイミングで來なくてもいいと思う。どう反応すればい  
いのか分からないし、どんな顔で向かい合えばいいのか分からない。  
「そうや宗太郎、何でウチにはタマちゃんのメアド教えてくれへん  
かつたんよ!? ビックリしたわ。なんでウチの知らん間に二人が  
こんなに仲良くなつてんねん!!! 呼び方も宗太郎君やし!」

「そういえば言つてなかつたっけ？ 悪い悪い、でも別に用があつ  
たわけじゃないだろ？ タマちゃんがピンチなら、その時にお前呼  
べばいいと思つてさー」

鈴原さんが怒つても、日向君は涼しい顔。そんな二人の様子に少  
し口元が緩み また笑わされた、と何だか愉快的気分になる。

「宗太郎君は何でそんなに無頓着かなあ……私とも、メールだけで  
全然会つてくれないし」

「おう？ タマちゃん、実は遊びたかつたのか？ そうかそうか、  
それなら言つてくれりゃあいいのに。今度、三人で遊びに行くか」

二人は恩人だ。直に言つても手伝つただけ、としか言わないだろ  
うけど。それでも、二人のおかげで私の進む道が見えたんだ。

今の私は、図書館で本だけ読んでいる人間でも、部屋に引き籠も  
るような人間でもない。

目の前の二人も変わつている、ただ夢を語るだけじゃなくて夢を  
かなえる手段を模索している。

あの頃には戻れないけど、戻りたいとも思わない。

「ええなあ、久しぶりに会えたんや。今度三人で遊びに行こか!!  
ウチ、海行きたい海ー」

「う、海？ 私、最近行ってないというか、お、泳ぐのあんまり得意じゃないというか」

「オツケー、電車乗り継げばすぐだな。ま、タマちゃんもゆっくり練習しろよ、俺が居たらナンパもないだろーしな」

私は二人と同じ列に並んで歩いていく。

真面目に生きる事は大切だけど、真面目に生きるだけが全部じゃない。

あの時、突然現れて本を読んでいた私に話しかけてきた二人組はそれを教えてくれました。

頭の中では鈴原さんと私と宗太郎君が海で楽しむ姿が浮かびます。

私……こんな人たちに出会えて嬉しいです。

## あとがき

はいどうも、知ってる人は知っている、知らない人は別に覚えなくともいいコニ・タンです。

いや、知ってる人も居るかも知れませんがこれは小説家になろう作者の交流サイト「言の葉の森」内の企画小説です。タッグ形式で小説を書くという斬新(?)な企画でした。

僕とペアになった方は企画主の水菜さんという方です。コニの事は知らなくても、水菜さんを知ってる人はそこそこ居るんじゃないでしょうか。そういう訳で、今回は書くに当たってそれなりにプレッシャーは感じておりました。

まずはもちろん、二人で物語を作りました。これは水菜さんの考えた粗筋に僕の考えた要素をくっ付け、そこから僕が微妙に意見したりで出来た話です。基本的な所は水菜さんですね。

で、ここからがさあ大変。なんと執筆役が僕になってしまったのです。そこからはもう漫才のネタ考えたり、登場人物の細かい所考えたり、頑張れるだけ頑張りました。それでも色々やらかして、水菜さんの手を煩わせてしまいました。

そんなこんなで、結構色々あって生まれたのがこのお話です。それだけに普段書いている話とは一味違ったものができたと思います、文体も半分ほど水菜さんだし。

まあ、こんな感じです。内容についてはほとんど触れていませんが、そちらは僕が一人で語っても的外れになるだけでしょう。

強いて言うなら、司書さんは書いている内に突然現れたキャラです。それだけに一番いつもの僕の物語っぽいキャラですね、かなり謎ですが。そこはもう謎のままにしといてください、形式美です。

では、「作文：コニ・タン 監修：水菜」で「An I s o s c  
e l e s」。皆さんの一時の娯楽や心の片隅に留めておける物語に  
なっていれば幸いです。

最後に、ここまで読んでくださって本当にありがとうございました！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6084g/>

---

An Isosceles

2010年10月8日15時33分発行